

大好きな彼氏との関係を 人権の視点から考えてみました!

鹿児島純心女子大学 学生サークルS&I 室屋い



私が高校時代、仲の良い女友達同士で集まると、よく恋愛の話になりました。ショートカットにしてみたら?と彼に言われて髪を切ったり、彼から手作り弁当が食べたいと言われて作ったり、少し太った?と言われてダイエットを始めたという話で盛り上がりました。高校時代は、流行の恋愛ドラマや雑誌の恋愛特集記事を見て、彼に好かれるため、見た目も中身もいい彼女になりたいとしていました。しかし、大学に入り学生サークルS&I顧問の谷崎先生と話してみても、いい彼女を演ずることに、息苦しさを感じていた自分に気付き、彼のために自分を変えることに疑問を持つようになり、真剣に考えるようになりました。

S&Iで活動していくうちに、彼の期待に応えたい、応えられないとダメな彼女だと自己評価が下がってきたことが、息苦しさの原因だったのだと再認識しました。テレビのバラエティ番組では、控えめで男性に尽くすタイプだけれども、少し子どもっぽい可愛さを持っている女性がもてはやされています。ドラマの主人公として描かれているのもそのような女性が多いです。そういった番組を見続けるうちに、いつの間にかメディアに描かれるべき女性像を追い求めてしまっていたのです。ところが自分のおかしさに気付き、自分らしくていいのだと思ったら、ふと心が軽くなりました。

自分らしさを取り戻すため、私はまず自分の気持ちと向かい合うことから始めました。自分は、何を感じ、何をどうしたいのかを考え、自分の気持ちをありのまま彼に率直に伝えるようにしました。そうすると、彼との関係の中で楽しいと感じることが多くなりました。そして彼も彼らしさを少しずつ出すようになりました。それまでは自分の弱い部分を見せようとしなかったのに、弱音を吐く姿を見て、彼もまた期待される男性像、すなわち力強く逞しい男でなければならないと、無理をしていたのかもしれないことに気がきました。

女だからこうあるべき、男だからそうしてはいけないと言われる場面が、私たちの周りにはたくさんあります。私たちは、一人一人が性別にかかわらずそれぞれの個性や感性を持ち、それを大切にされる権利を持っています。性別によって役割を押し付け、その人らしさを奪うことは、その人の人権を侵害することです。^{*}ステレオタイプ化した「女らしさ、男らしさ」を押し付けていい人も、押し付けられていい人もいません。私はそれを、自分の大切な人との間で知ることができました。皆さんにも、大切な人との心地よい関係性を一緒に考えてもらえたら嬉しいです。

*ステレオタイプとは…行動や考え方が、固定的・画一的であり、新鮮味のないこと

「一人一人の人権の尊重」を基盤とする 男女共同参画の視点が地域づくり事業に 織り込まれるとき…そこには、We Do!がある …女性50人委員会の新たなチャレンジ



オフィスピュア代表 たもつゆかり

We Do!は、女性50人委員会の合言葉です。これまでの女性50人委員会は、「市政に対する提言」を行ってきましたが、それはサービスを受ける側の視点に立つものであったと思います。今回の新たなチャレンジは、「我々」は、サービスの受け手であるばかりでなく、サービスの送り手の側にも立っているという自治の担い手としての視点を明確にします。また、地域コミュニティ(共同性と自治性に満たされた一定区域の居住空間を共有する生活者集団)を構成する一人一人の側から、地域生活の質の向上と地域生活課題の解決に向けた地域づくり事業構想を立て、その実現に向けた経営計画をつくることを目標としています。この目標に至るまでに尽くしていく思考の過程で、最も重要なことが「一人一人の人権の尊重」という視点であることを、委員の皆さんは、すでに、一年目の活動を通して実感されたと思います。

We Do!・・・その始まりは、確かな「問い」を立てること

地域づくりにおいては、地域課題を「誰」が「どのような価値意識」で「どのように認知するか」という課題認知の力量—「問い」を立てる力量がきわめて重要であり、この点にこそ、地域課題を具体的に捉えられる**We Do!**の価値があります。

委員の皆さんは、確かな「解」は、確かな「問い」から導かれることを、論理的思考を磨くスキルによる徹底した現状把握に至る考察の過程で実感されたと思います。現状把握の基盤となった身近な情報の一つ一つについて、どのような価値意識で捉えられたのかを点検し修正する作業は、特に困難をきわめました。例えば、「若い人は子育てや仕事を優先して地域活動に参加しない」という現状の捉え方には、地域活動や若い人に関する特定の価値意識(デアルベキ)が働いています。事実(デアル)としての状況は、「私たちの地域では、共働きしている子育て中の人の多くが、地域活動に参加していない」ということであつたと気付いたとき、地域活動に参加できない状態にある困難への共感が生まれ、地域活動における長年の慣行や運営のありかたが、「多様化している地域のリアリティに対応できていないのではないか?」という「問い」が立ちました。このような考察の過程は、異なる立場を生きる他者の状況への偏見や思い込み^{しんしん}に真摯に向き合い、アタマでは解っていたつもり「一人一人の人権の尊重」について、実感的理解を深める学習としても有意義だったと思います。

一人一人により近く在るからこそ、一人一人により深く寄り添うことができる・・・だからこそ**We Do!**

